

能とシェイクスピアと行動分析¹ Noh, Shakespeare, and Behavior Analysis

上田 邦義
UEDA Kuniyoshi

In the commemorative lecture delivered at the 20th Convention of the Japanese Association for Behavior Analysis in August, 2002, I evaluated B.F. Skinner(1904-90), the founder of the Association of America, as a social reformer first and foremost, referring to his lecture “The Non-Punitive Society”. I also discussed Henry Thoreau’s *Walden* and Dr. Skinner’s *Walden Two*, and declared I would write *Walden Three* as a Noh play whose *shite* or main role would be Thoreau or Skinner. “One world at a time,” Thoreau said, and Skinner also seems to have believed only in this life. I believe in the next life also, as presented in many Noh plays as well as some of Shakespeare’s plays. I would like to live this life as fully as possible and will pass from this life to the next, wishing to live more beautifully in a more beautiful world. Lastly, I presented my shortened version of “Noh Hamlet in English” as Hamlet, with Naoko MIYANISHI as Ophelia’s ghost, accompanied on the Noh flute by Dr. Koichi ONO, President of the Japanese Association for Behavior Analysis.

「日本行動分析学会」20周年記念大会という、おめでたい会にお招きいただきまして、誠に有難うございます。私は、能とシェイクスピアの融合研究とか、もっばら楽しいことをやっております、このお話をいただきました時には、皆さんは科学者ですから、3日間難しい議論をされるわけで、多分私には余興を期待されてのことと考えました。(笑) ご期待に添うべく、後ほど『英語能・ハムレット』*Noh Hamlet in English* という面白いパフォーマンスを、お目にかけてたいと思います。

実は、行動分析学の生みの親、スキナー教授 Dr. B.F. Skinner(1904-90)に、私はお目にかかっているかもしれないのです。1973年から75年までハーヴァード大学におりました

ので、ファカルティ・クラブもしくはハーヴァード・ヤードのどこかで拝顔の栄に浴しているかもしれないというわけです。さらに実は、私は、30年ほど前から、アメリカの「ソロー学会」The Thoreau Society の終身会員なのですが、73年にフルブライト研究員としてハーヴァードへ参りました時に、私のホウスト・ファミリーから *Walden Two* というタイトルの小説をいただいたのです。それが、スキナー教授の著作だったのです。

皆さんご存知のように、*Walden* は Henry Thoreau (1817 - 62) という19世紀中葉のアメリカの思想家・作家の代表的な著作で、わが国の松尾芭蕉の『奥の細道』とか鴨長明の『方丈記』のような、紀行文のような随筆のような、2年2ヶ月、ボストン近郊のウォルデン・ポンド Walden Pond という小さな湖のほとりで、一人簡素な生活 simple life をした、その記録です。現代的な意義の極めて大きな作品で、農薬や化学薬品の恐ろしさを警告したレイチェル・カーソン Rachel Carson (1907-64) の『沈黙の春』(『生と死の妙薬』という翻訳もあります) *The Silent Spring* の先駆的な作品とも言えます。19世紀半ばにすでに自然破壊などの環境問題を予見している。そして人間の本当の幸せとはどういうものかを考えている。人間観とか自然観、社会観とか世界観に関する本です。

スキナー先生が *Walden Two* という題で小説をお書きになったということは、ソローの *Walden* がよほどお好きだったに違いないと思うのであります。私も、*Walden* が大好きでありまして、もしアメリカ文学の中から一冊だけ推薦しろと言われれば、躊躇せずに、これを推したい。内容の上質であること、英文の美しさ。ソローは、いわば『聖書』を書くようなつもりで書いたようですね。10年ほど前、岩波文庫で飯田実さんという方の大変優れた、美しい日本語訳が出版されました。まだお読みでない方にはぜひお勧めします。

さて、人間というものが、いかに、巧みに、刺激に反応するものが。昨2001年9月11日の同時多発テロ事件直後の、アメリカ人の行動が注目されます。その素早さには驚かされます。しかし同時に、そうした周囲の反応、環境の変化にも拘わらず、人間に対する信頼によって、「報復」とか「戦争」によって問題は解決しないと直ちに宣言した二人の人がいます。言語学者のノーム・チョムスキー教授 Noam Chomsky と、ニューヨーク在住の日本人作曲家坂本龍一氏です。坂本らがその直後、世界の声を編集した『非戦』*No War* これは素晴らしい本です。(オノ・ヨーコさんの同様の活動はあとから知りました。)

しかしスキナー先生は、1979年、慶応義塾大学で名誉学位を授与されたときの記念講演“The Non-Punitive Society”の中で、これらの方々と同じようなことを述べておられる。日本行動分析学会編『行動分析学研究』第5巻第2号1990の中に、佐藤方哉先生の「罰

なき社会」という立派な訳とともに収められています。その1節を引用させていただきます。

When we look at the world today with its war , terrorism , and violence in many places , a non-punitive society seems “utopian” in the sense of impossible. And, indeed, we are not likely to arrive at a peaceful world in the immediate future by applying the experimental analysis of behavior to international diplomacy. ... Perhaps our best opportunity will be to start below the level of international affairs. If, because of positive consequences alone, people can acquire knowledge and skills, work productively, treat each other well, and enjoy their lives, those who deal with international affairs may be able to use non-punitive measures more effectively. ²

いたるところで戦争やテロや暴力がはびこっている今日の世界をながめるとき、罰なき社会はそれが不可能という意味で「ユートピア」のように思われます。そして、たしかに、外交に実験的行動分析学を応用することによって平和な世界を近い将来に手にするといったことはありそうもありません・・・おそらく、我々が選ぶべき最良の道は、国際的な事柄よりももっと下のレベルから出発することでしょう。もし、正の結果だけによって、人々が知識や技能を獲得し、生産的に働き、お互いが良好な関係で結び、生活をエンジョイすることができるならば、国際的な事柄に従事する人々も罰的でないやり方をもっと有効に用いることができるようになるでしょう。³

そう述べた後で、「戦争という手段に訴えるのは、不幸で怯えた人たちです。幸福な国家間の国際的交渉ならば、もっと良い結果を生むはずです」“It is the unhappy and the frightened who resort to war. International negotiations among happy nations should be more successful.” とはっきりと述べておられる。⁴ そしてスキナー先生は、こう結論しておられる。「これらの問題は、どんな罰的で嫌悪的なやり方によっても解決することはできません」⁵ “We cannot solve these problems through any aversive means.” また、「競争的ではなく協力的な解決が必要とされるのです」“A cooperative rather than a competitive solution is needed.” そして「その解決策が最終的にどのような形になるにせよ・・・できるだけ多く、正の強化にたよることによって、その解決に近づくことができるの

です」“Whatever the final form of that solution, we can all move toward it by turning as often as possible to positively reinforcing measures....” と。⁶

スキナー先生の「オペラント行動」は、パブロフの「条件反射」と並んで有名なものかどうかはいましたが、先生の本質は、心理学者というよりは「社会改革家」“a social reformer” だったのではないのでしょうか。今、もし、Dr. B.F. Skinner が生きておられたならば、どんな発言をされ、どんな行動をとられたことか。

先程、Henry Thoreau の *Walden* について話しましたが、そして Skinner 先生は *Walden Two* を書かれましたが、私はいずれ *Walden Three* を書きたいと願っています。日本の能の形式で、シテはソローか、スキナー先生、というわけです。

私は、この世がすべてとは、思っていないのです。能の世界は、この世とあの世の橋渡しのような世界です。幽玄な笛の音に誘われて、霊が登場するのです。私は、自分が死ぬときには、スーとこの肉体から脱け出て、少しの間はこの地上を上から眺めているかもしれませんが、すぐにも天上に舞い上がり、宇宙に広がってしまいたい、と願っています。私が病院へ行きたがらないのは、自分のことを、肉体よりは精神、と思っているからです。お墓はいらないですね。そんな所に舞い降りて来たりはしませんから。皆さんは、どう考えておられるのでしょうか。

さて、能に戻りますが、私はシェイクスピアの四大悲劇『ハムレット』『オセロー』『マクベス』『リア王』を英語能に創作して、その主人公のシテを舞ってきました。⁷ 外国でも能の話をしてながら舞って見せたりしてきました。この私のシェイクスピア能が、皆さんの行動分析学とどうつながりますか。これから少しご説明申し上げて、それからパフォーマンスをお目にかけてしたいと思います。言葉によるヴァーバル・コミュニケーションと、よらないノンヴァーバル・コミュニケーションですか。

私はこの世では、言葉 Words と行動 Actions は、同様に大事なものと思っています。さらにもう一つ大事なものは、思い Thoughts すなわち心 Mind です。行動分析学では「心」は認めないそうですが、私は、この三者は、別物で、しかしこの三者が一致しないと、この世はうまく行かない、と考えています。これが私の提唱する「3Kの法則」(3Kとは、心、言葉、行動のこと)、英語では、“The Law of TWA”(Thoughts, Words, and Actions)です。この世が本当にうまくいくための法則です。現実の世界では、これがばらばらになっている。しかし一つ違っていたら、他の二つも台無しですね。本当に美しくは思われたい、本当に人を納得させることはできない。あるいは、宇宙の法則に合致しない、と言っ

てもいいのかもしれない。これが実は、今日の私の話の、結論です。

さて、それでは、『英語能・ハムレット』について、簡単にご説明いたしましょう。先ず最初に、能樂の大成者、世阿弥が14世紀に作りました名作『井筒』の冒頭の部分「次第」を謡ってみます。お手元の資料をご覧ください。

「次第」^{あかつきごと}「暁^{あか}毎の^{ごと}關伽の水。あかつき^{あか}毎乃^{あか}關伽の水。月も心や澄ますらん^{あか}」⁸

これは墓所を詣でるシテの女の謡です。7・5・7・5・7・5の韻律で、36音でできている。今度はこれと同じ節で、シェイクスピアの『ハムレット』の最も有名なせりふ、「生きるか死ぬか、それが最大の問題」の英語の原文、“To be or not to be, that is the question.”を謡ってみます。（“To be or not to be, that is the question. To be or not to be, that is the question. To die, to sleep, no more.”「生か死か、それが最大の問題。生か死か、それが最大の問題。死は、眠り、に過ぎない」を同じ節で謡う）。いかがでしょうか。

大学4年の時に、仲間と『ハムレット』を英語で演じて、やがてこれを能舞台で演じてみたい、シェイクスピアの原文のまま、世界中の人々に理解できる英語の原文で、能の様式で演じてみたい、そうすれば、あの能の精神性が通ずるに違いない、そう思ったのは1960年代でした。しかし当時は、英語で謡曲ができるはずがない、誰もやった人はいない、という環境の中でした。確かに日本語は、子音プラス母音でできていて、その一音一音を強く謡うのが、能謡の特徴である。イタリア語ならともかく、英語では無理かもしれない。

しかし私は、観世流の謡いと仕舞を習いはじめました。そして1973年にフルブライト研究員としてハーヴァード大学に行きました。そこで雅楽専攻のジョン・ウォード John Ward教授から、能の音楽について学生たちに話してくれないかと頼まれたとき、気軽に、大胆にも、お受けしました。そしてエマソン・ホールで「ハムレットの第1独白」を舞いました。まだ謡えなかったので、せりふのままで舞ったのです。終演後、励まされました。それがいい刺激となりました。75年、帰国後は寸暇を惜しんで『英語能・ハムレット』の創作に没頭しました。同僚と飲みに行ったりもしないで。そして1980年ごろ、ようやく謡えるようになりました。いかがだったでしょうか。⁹

具体的な謡い方について少しご説明しましょう。

シェイクスピアの英語の韻律ですが、“To be or not to be,”の最後の“be”を2音節に謡えば7音になります。そして“that is the question.”は5音節です。「月も心や」にあたる“To die, to sleep,”は、“die”と“sleep”を2音節、3音節に謡うことで、全く同じように

謡えると思います。もちろん、シェイクスピアの詩劇は、弱強調の韻律で書かれていますから、それも意識しながら、英語として不自然にならないように、しかし各音節を強く謡うようにすれば、どちらにとっても違和感なく謡えるというわけです。いかがでしょうか。

つまり、英語謡曲は可能なのです。

夏目漱石が明治 44 (1911) 年、坪内逍遙の翻訳による『ハムレット』上演を帝国劇場で見ました。彼はこれを『東京朝日新聞』紙上で二日にわたり批評して、シェイクスピアは「詩劇」であって、その独特の「詩」故に、日本語に翻訳することは不可能であると述べ、にも拘らず原文による鑑賞を諦めて、敢えてこれを日本語に翻訳することは、「日本人を見捨てたも同然」であると論じ、しかしなお、日本語に翻訳上演する必要があるならば、

「別格の音調」をもって謡う「能に翻案」すれば「面白かろう」と論じているのです。¹⁰

漱石が提唱したのは、日本語の「シェイクスピア能」、つまりシェイクスピア劇を日本語の能に翻案して上演する、というものでした。私には、シェイクスピアのあの「ブランク・ヴァース」blank verse (弱強五歩格の無韻詩) を日本語の詩劇に翻案する能力はありませんから、英語の原文のまま、それに観世流謡曲の謡い方で節付けをして、能に翻案したわけです。そしてそれなら世界中の英語を理解する人々に、能をわかってもらえると考えました。しかし、英語謡曲というものが、そう簡単にできるわけではありませんし、さらに能の様式にするには、どう構成するか。さらに能としての演出意図などを考えれば、不遜ながらシェイクスピアの原文のせりふだけでは、十分ではないのです。結局、5場構成の、上演に4時間半を要する大変長い英語能に創り上げて、それを最初は静岡地方の能舞台で、それから次は東京の矢来能楽堂で上演いたしました。1982年から83年にかけてのことでした。¹¹

内容的に、いかにも能らしいという箇所をご紹介しますと、能『山姥』のキリの謡い方と舞い方をほぼそのまま取り入れた場面です。それはハムレットが、「生か死か、それはもはや問題ではない」と謡い、舞う場面です。英語では、“To be or not to be, is no longer the question.” というもので、これはもちろん私の解釈で、後半は私の英語です。拙い英語かもしれないのですが、しかしこれでシェイクスピアの『ハムレット』が『能・ハムレット』になったと評されたところです。¹²

つまり、ハムレットは、オフィーリアの墓前に坐禅を組み、瞑想する。激しい後悔の後に一種の悟りに到達する。実は、オフィーリアの亡霊が現れて、激しく後悔する彼の背後に歩み寄り、彼の頭に手をかざし、これを許し、祝福して、又静かに立ち去る、という場面

なのです。ハムレットはこれまでの「生か死か、それが最大の問題」という迷いから脱け出て、そういう迷いから解放されて、「いま、ここ」に生きるという境地に到達する。¹³

『山姥』のこのキリの場面は、禅を世界に紹介した鈴木大拙師が、禅の悟りの境地と関連させて引用された1節です。ところで、「いま、ここ」“here and now”という生き方は、今の私は、それでは十分ではないと 생각합니다。多くの宗教の教えが、「いま、ここ」とか「明日を思いわずらうな」といいますが、本当に「いま、ここ」に全力を傾注するには、目標が必要なのです。全てを忘れて「今、ここ」に自己を没頭させよとは、21世紀の現在においては、管理者には都合のいい思想ですが、私にはそれは十分な生き方ではないと思われる。その生き方は、人を戦争に導くかもしれない。明日への Vision なしに、本当に現在に devote することはできない。

今の私が到達した結論を申し上げれば、愛とは、助けること。愛する人が、よりよく生きられるように助けることであり、今、21世紀の人類の目標は、人類全体の「共生」である。互いに相手の文化や伝統や価値観を尊重し、調和ある世界を作り上げることであると思う。尊重している間は調和ですが、さらに互いに相手を愛し合えば、融合・融和に至る。そして新たな価値を誕生させることになる。¹⁴

そういう訳で、この「悟りの舞」の詞章、せりふは、当時は「今を生きる」“live in the present”でしたが、昨年、“live in the present future”「現在の未来に生きる」と改めました。私たち研究者は、特に文系の研究者は、過去の研究のみに傾き、その成果を教えることに汲々として、ともするとそれが最高の価値、最高の教えのように思い違いする。

これからどんどん、よりすぐれた思想や価値や法律や、真理や美が創造され発見される、されなければならない。科学の世界のこれまでの成果も、長い人類の歴史の中に置いて見れば、まだまだ幼稚なものでしょう。そういうものに縛られては、折角の、一回きりのこの人生、勿体無いではないですか。(問)

私の40年の教員生活は、大変な失敗だった。学生たちにもっぱら過去の文化遺産を教えるだけで、人間とは本来どう生きるべきものかとか、我々の社会をもっとどうしたらいいのかとか、共に考えることをしなかった。過去があって現在、現在があって未来という発想では、さして進化はしない。発想を逆転させて、不連続でもいい、非論理でもいい、Imaginationをもつ必要がある。そしてまず大きな Vision をもつべきだ。人類全体の幸福とか。宇宙意志とか。それに向かって進むべきだ。方法などは後から考えればいい。(問)

これが、今日の私の、結論のひとつです。

さて、あともう一箇所、『英語能・ハムレット』のキリ、最後のシーンですね。お手元の資料の『江口』のキリをご覧ください。¹⁵これが『英語能・ハムレット』のキリの場面の原曲です。遊女の、江口の君が救われてゆく。Thoreau は死の直前に、“One world at a time.” 「一時に一世」と言いまして、来世といったものは信じていなかった、と思われる。¹⁶ スキナー先生も、死後の世界とか、死後の命というものを、信じておられなかったのではないのでしょうか。先程の大拙師は、「わからんな」とか答えられたそうです。¹⁷

こういう言葉を文字通りに受け取ってよいものかどうか、疑問がないわけではありません。しかし私は、「この世も素晴らしかった。しかし、もっと素晴らしい、もっと美しい世界へ行く」ことを願って、この世を去りたいと思います。この世を、そんな風に生きたいと思っています。結果が大事だと言われる世界ですが、私は、結果以上にその人が、何を目指し、何を人生の目的として生きたか、その Direction (方向)の方が、もっと大事だと考えています。過去よりも現在、現在よりも未来、という考え方が、もっと大切だと思うのです。人類の進化の方向に向かって、ほんのわずかでも貢献できれば、大往生できるだろうと思うのです。

能では、死は肉体の死に過ぎない。死が全ての終わりではない。

遊女にもいろいろの人がいると思いますが、江口は最後に救われてゆく。それでは、謡ってみます。

シテ「^{こころ}心とむるゆえ 地「^{うきよ}心とめず八浮世もあらじ シテ「^{した}人をも慕はじ

地「^{ま くれ}待つ暮もなく シテ「^{わか し あらし}別れ路も嵐吹く 地「^{もみじ つきゆき}花よ紅葉よ。月雪のふる

ことも。あら^{よし}由なや シテ「^{かり やど}思へば飯の宿 地「^し思へば飯の宿に。心とむ

なと人をだに。^{いさ われ}諫めし我なり。これまでなりや帰るとて。^{すなわ ふげん ぼさつ}即ち普賢菩薩

と^{あらわ ふね びやくぞう}現れ舟は白象となりつつ。^{しるたえ はくうん}光と共に白妙の白雲にうち乗りて西の空

に行き給ふありがたくぞ^{おぼ}覚ゆるありがたくこそ^{おぼ}覚ゆれ¹⁸

『英語能・ハムレット』では、このキリの場面はハムレットが、レアーティーズとのフェンシングで図らずも毒剣に倒れ、その後の別れの舞、「救いの舞」の場面です。謡いはシェイクスピアの原文で、“Exchange forgiveness.”「互いに許し合おう」と始まり、“Heaven make thee free of it.”「天よ、彼をこの世から解放し給え」という祈願文に続きます。¹⁹

そして、原曲『江口』の「思へば仮の宿」の部分は、そのまま日本語で謡ったり、ラテン語の“Memento mori.”「死を忘れるな」という格言を謡ったり、あるいは“This world is not for aye.”「この世は永遠のものではない」というシェイクスピアの英語の原文を謡ったりします。この場面は、その日の観客との関係で、どの言葉にするかを決めます。もちろん、謡曲の節付けで謡います。

そして最後は、「おやすみなさい、麗しの王子よ。飛翔する天使の歌声に誘われて、安息の世界に入られますよう”“Good night, sweet prince. Flights of angels sing thee to thy rest! Flights of angels sing thee to thy rest.”と、ハムレットは幕入りします。¹⁹

1997年、英国皇太子妃のダイアナさんが亡くなられた時、ウエストミンスター寺院で盛大な葬儀が行われました。世界中の人々がテレビの前に釘付けになりました。辛かった最後の数年、彼女は貧しい人々の幸せや、地雷撤去活動などを生きがいに行っていたことが分かりました。彼女の命は、死後に輝いたのです。この告別式の終わり近くに、少年聖歌隊が、なんと“Flights of angels sing thee to thy rest!”と歌っているではありませんか。

私の話はこれで終わりです。

それではこれから、パフォーマンス『英語能・ハムレット』をお目につけてください。当行動分析学会会長の小野浩一先生の、プロ級の、素晴らしい能管で、私がシテのハムレットを、宮西ナオ子さんがツレのオフィーリアの亡霊を、舞います。初演では4時間半を要した『英語能・ハムレット』を、本日は十数分で演じてみようというわけです。初めてのことにチャレンジするというのも、いい刺激ですね。それでは、宜しく願いいたします。(以下、『英語能・ハムレット』パフォーマンス部分、省略)

註

- 1 . 「日本行動分析学会 20 周年記念大会」(2002 年 8 月 23 日)における同名の講演をまとめたもの。
- 2 『行動分析研究』*JAPANESE JOURNAL OF BEHAVIOR ANALYSIS*, 第 5 巻第 2 号、1990、日本行動分析学会編、p.95
- 3 . 同上、p.105
- 4 . 同上、p.95, p.105
- 5 . 同上、p.96, p.106
- 6 . 同上、p.96, p.106
- 7 . 宗片邦義『日英二ヶ国語による「能・オセロー」創作の研究』勉誠社(現、勉誠出版)、1998 全般参照。
UEDA, Kuniyoshi, *Noh Adaptation of Shakespeare*, Hokuseido, 2001 全般参照。
- 8 . 観世左近(二十四世)訂正著作『井筒』檜書店、1965
- 9 . 宗片邦義「能とシェイクスピア」『英語文学世界』英潮社、1975 年 8 月号
H.B. Durnell, *Japanese Cultural Influences on American Poetry and Drama*, Hokuseido, 1977, pp.234-37
- 10 . 夏目漱石「坪内博士とハムレット」『東京朝日新聞』1911 年 6 月 5・6 日
宗片邦義「なぜシェイクスピア劇は今まで能にならなかったのか：逍遙と漱石の芸能観に関連して」『芸能史研究』123 号、芸能史研究会、1993、pp.34-38
- 11 . 宗片邦義『英語能・ハムレット』(*Hamlet in Noh Style*)、研究社出版、1991
鳴海四郎『「能・ハムレット」を拝見して』『悲劇・喜劇』早川書房、1983 年 1 月号
「英語能・ハムレット」グラビア『週刊新潮』新潮社、1983 年 3 月 10 日号
「英語能・ハムレット」グラビア『週刊文春』文芸春秋社、1983 年 3 月 10 日号
岡本靖正「宗方・能・ハムレット」『英語青年』129-3、研究社、1983 年 6 月号
荒井良雄「日本のシェイクスピア劇上演」『文学』54、岩波書店、1986 年 4 月号
- 12 . 上記、注 11 参照。
- 13 . 浅井方通『能・ハムレット：ある英文学者の試み』8ミリ・フィルム、Asai Film、静岡、1982 年(日本語版は「静岡けんみんテレビ映像コンテスト」審査委員長賞受賞。英語版は「カナダ 8ミリ・フィルム・コンテスト」3 星賞受賞)
- 14 . 上田邦義「競争から共生・協調・調和へ」『融合文化研究』第 1 号、国際融合文化学

- 会、2002、pp.70-75
15. 観世左近(二十四世)訂正著作『江口』檜書店、1965
 16. MUNAKATA, Kuniyoshi, "The Most Remarkable American: R.H. Blyth on H.D. Thoreau", *Otsuka Review*, 9, 東京教育大学大学院英文学会、1972、pp.56-67
宗片邦義「ヘンリー・ソローと禅」*Otsuka Review*, 14, 1977、pp.22-33
 17. 同上。
 18. 上記、注15参照。
 19. William Shakespeare, *Hamlet*, V. ii. 340-43 (Globe Edition)
 20. 上記、注11『英語能・ハムレット』他参照。

参考文献(注に挙げたものは省略)

1. 上田邦義「世界の文化の調和と融合を求めて」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』創刊号、2001
2. 上田邦義「巻頭言：全ては我々の選択にかかっている」『融合文化研究』第1号、国際融合文化学会、2002
3. 上田邦義「能とシェイクスピア」『文学・語学』174号、全国大学国語国文学会、おうふう、2002
4. 表章・加藤周一校注『世阿弥・禅竹』(芸の思想・道の思想1) 岩波書店、1974
5. Suzuki, D.T., *Zen and Japanese Culture*, St. Martins Press, 2001
6. Suzuki, D.T., *Zen Buddhism: Selected Writing of D.T. Suzuki*, Doubleday, 1996
7. ソロー、H.D., 飯田実訳『森の生活：ウォールデン』上・下、岩波文庫、1995
8. ナシュ、ロデリック・F., 松野弘訳『自然の権利：環境倫理の文明史』ちくま学芸文庫、1999
9. 夏目漱石『漱石全集』第11巻、岩波書店、1965
10. Blyth, R.H., *Zen in English Literature and Oriental Classics* (禅と英文学), Hokuseido, 1942
11. 古田紹欽・柳田聖山・鎌田茂雄監修『叢書・禅と日本文化』全10巻、ペリかん社、1997

ビデオ

- 1 . “Shakespeare Japanese Style”, *Japan Screen Topics, March 1985*, Ministry of Foreign Affairs, Japan, 1985 (外務省制作、今月の日本紹介。宗方邦義作・演出・主演『英語能・ハムレット』国立能楽堂公演の一部を記録)
- 2 . 『英語能・ハムレット：講演と公演』、国際融合文化学会、2002 (上田邦義作・演出・主演。2002.10.26 堺能楽会館公演を記録)